【講　演】

古典期アテネの経済思想

雨　宮　　健

発達・未開論争，形式主義・実質主義論争

発達・未開論争（Modernist-Primitivist Controversy）は1893年に Bücher が古代ギリシャ経済は未開経済，即ち，家単位の，市場に依らぬ物々交換に基づく経済であると説いたのに対し，Meyer が反対し，古代ギリシャ経済は発達してをり近代経済との相異は程度のみであると主張したことによって始まった。Finley は，Weber と Polanyi の影響を受け，古代ギリシャにおいては経済は独立に存在せず，言はば社会の中に埋め込められてゐたと述べて，このやうな立場を実質主義と称した。したがって，古代ギリシャの経済は近代経済学の手法によっては理解出来ず，独自の行動原理を開発せねばならないと説いた。これに対して，あらゆる経済は，市場の発達した近代経済を分析する同じ手法で分析し得るといふ立場を形式主義と言ふ。Finley は発達・未開論争の焦点をややずらして形式主義・実質主義論争（Formalist-Substantivist Controversy）に置き換へたと言へる。もとよりこの二論争は同一ではない。前者は経済の発達状態の事実に関与し，後者はその分析手法に関与する。しかし，当然，Weber, Polanyi, Finley がさうである如く未開主義者は実質主義者であり，発達主義者は形式主義者である場合が多い。

実質主義は二十世紀初期に特に人気があった。それは Ruth Benedict, Margaret Mead 等の文化人類学者によって提唱された文化相対主義の影響下にあった。彼等の思想は人間は時代，場所を超えて本質的に同一であるといふ見識に反する。この根本的錯誤の結果，Mead はサモア文化の滑稽なモデルを捏

造し，Benedict は歪曲された日本文化像を創造した。Finley が人間の普遍的欲求である利益追求を古代ギリシャにおいて軽視し，名誉追及を以ってこれに換へようとしたのも文化相対思想の一環である。古代ギリシャにおいても名誉追及の方が利益追求よりも重要であったとは考へ難いし，諸々の著作に現はれる当時の状況から推察しても肯んじ難い。しかし，すべからく利益極大，効用極大の原理によって経済行動を説明しようとする形式主義もまた一方の極端であり，古代ギリシャはおろか現代経済ですらこれのみによって説明できないことは明らかである。その意味では実質主義にも一面の真理がある。

当初の発達・未開論争に関しては既に決着が着いたといへる。最近十年間の学会の趨勢は，少なくとも五世紀，四世紀のアテネにおいては製造過程，市場，金融等の面において経済はかなり発達してゐたといふのが結論である。(Paul Carledge, Edward E. Cohen, and Lin Foxhall, eds., *Money, Labour, and Land*, Routledge, 2002 を見よ。)

五世紀，四世紀のアテネ経済

古典期アテネの経済思想を考察する前に当時の経済の概観を見ることにしよう。先づ当時の経済をどういふ資料から知ることが出来るであらうか。

歴史家	ヘロドトス，ツキディデス，クセノフォン。
哲学者	プラトン，アリストテレス，テオフラストス。
弁論家	デモスセネス，リュシアース，アンドキデース。
喜劇作家	アリストファネース。
碑　文	Inscriptiones Graecae

しかし文献に現れる数字は往々にして頗る不正確である。例へばデモスセネスは弁論第二十の中でアテネは年間 400,000 medimnoi（1 medimnos は約 51.8リットル）を黒海地方から輸入し，ほぼ同量を他地方から輸入すると言ってゐるがこの数字をどの程度信用すべきかは不明である。デモスセネスが信頼

すべき資料を持ってゐたかどうかも定かでないし，弁論家は自分に都合の良いやうに数字を変へる場合もあるからである。アリストファネースは喜劇の中でしばしば日常品の値段を挙げ，これらの大部分は大よそ正確であると言はれてゐるが，時には喜劇の効果のために誇張する場合もあるであらう。碑文に現れる数字はより信憑性が高い。しかし多くの碑文は散逸し，現存するものの多くは判読不能の部分を含んでゐる。

このやうな文献，碑文を全て使っても経済現象の正確な数量化は不可能である。精々幅広い上限，下限を設定することが出来るのみである。しかしいくつかの accounting identities（会計恒等式）を使へば，その幅を狭めることが出来よう。例へば，A を人口，B を一人当りの穀物消費量，C を耕地面積，D を農業生産性，E を穀物輸入量とすると $A \times B = C \times D + E$ といふ恒等式を得る。この恒等式を満足させるやうな数の幅は最初に与へられた幅よりも狭い筈である。次に貧困農家の収支，富裕農家の収支，商工セクターの収支，ポリスの財政収支，及び貿易収支の五つの恒等式よりなるモデルを基に得た四世紀のアテネ経済の概観を述べる。いくつかの数値も紹介するが，これはまことに大雑把な予測であることを心得てもらひたい。

人　口

市民（家族も含めて）	100,000
外国人居住者	30,000
奴　　隷	90,000

奴隷の三分の一は家庭において家事並びに農業に従事し，三分の一は商工業に従事し，三分の一は銀山で働いた。外国人居住者の多くも商工業に従事した。市民の貧困層も労働に従事したが，市民の本来の仕事は政治に携はることであり，アテネ経済は奴隷と外国人居住者によって支へられたと言ってよい。

穀　物（大麦と小麦）

国内生産量	750,000 med	
国内消費量	1,730,000 med	
輸　入　量	980,000 med	612 talent（1 talent=6,000 drachmas）

貿　易

輸　入（輸出）	総　　額	2,760 talent
輸出の主な項目	工業生産品	1,466 talent
	銀	825 talent

国家財政

ポリスの支出は約 1,000 talent であり，そのうち軍事費が70％を占めた。その他の支出は政治，司法への参加に対する報酬，スポーツやドラマの competition を含む祝祭の開催，及び社会福祉であった。所得税は特別の場合を除き徴収されず，財源の多くは有産階級による自発的な寄付（leitourgia）に依存した。五世紀にはアテネ同盟からの貢賦金が財源の大きな部分を占めてゐたが四世紀には大幅に減少した。

GDP 試算

4,400 talent　（内訳　工業 2,500　　銀 1,000　　農業 900）

市場，金融

金貨は 7 世紀リディヤで銀貨は 6 世紀アテネで鋳造されて以来広範囲に使はれ，五，四世紀のアテネにおいては貨幣経済は大いに発展し，大部分の農業，工業製品は市場で売買された。アテネのアゴラーの盛況の様子は遺跡でも明らかであり文献にも多く記されてゐる。例へば，クセノフォンはアゴラーでは多くの製品が夫々決められた場所で売られてゐるので奴隷を使ひに出しても迷ふ心配がないと言ってゐる（Oikonomikos, viii 22）。テオフラストスは「性格」といふユーモラスな作品の中で三十の悪い性格の

例を挙げてゐるが，その多くは，アゴラーにおける世知辛い態度に係ってゐる。又，アリストファネースの「アカルナイの人々」にはアゴラーで売られる品物の名前が列挙されてゐる。銀行業も盛んで手形も発行され産業，貿易への投資も行はれた。四世紀のアテネには三十人の銀行家の名前が知られてゐる。中でも有名なのはパシオンで奴隷の身から始めてアテネ有数の資産家になり，つひには市民権を獲得した。

経済発展

この時代のアテネにおいては技術進歩は軍事面と農業を除いては顕著に認められない。豊富な奴隷の供給が技術革新への動機を弱めたといふこともあらう。又，五，四世紀のアテネにおいては経済成長の形跡もない。しかしこれは年表からも明らかな如くこの時代のアテネはその半分近くの年月を戦争に費やし，人口も減少してゐる事実から見ても当然であらう。しかし，より長い年月を見てみると，発掘された人骨や家屋の跡から大雑把に類推してギリシャ全土において紀元前800年から300年にかけて一人当り消費量は倍近く増加したといふ試算がある。これは年間0.14％の増加に該当する。これを近代のデータと比較すると，1580-1820におけるオランダの年間一人当り消費量の増加は0.2％であった。(Ian Morris, "Economic Growth in Ancient Greece," *Journal of Institutional and Theoretical Economics*, Dec. 2004.)

上に挙げた数値は恒等式のみにより構成されたモデルを基にして計算された。このやうなモデルを作成するためには経済構成員の行動原則に関する仮説を設ける必要はない。従って，先に述べた形式主義，実質主義論争を超越してゐると言へる。実際，大多数の計量経済学者はモデルを作成する際，行動原則よりも統計的適合度を重視するのである。Alan Brown and Angus Deaton, "Models of Consumer Behavior: A Survey," *Economic Journal*, 1972, pp. 1145-1236 は第

二次大戦後の需要関数推定の大部分は消費者行動の原理を無視して実用的見地から求められた，と言ってゐる。又，Thomas Shelling は1994年のバークレー経済学部の卒業式における演説で，彼が経済学で学んだものの中で，真実で重要で且つ自明でないものを五個挙げるならば，それはすべて恒等式である，と言ってゐる。

五世紀，四世紀のアテネ民主制

古典期アテネの民主制はエリートと大衆との対立の均衡の上に成立ったと言へる。エリートは生まれの良さ，財産，能力の三要素を含む故，エリートと大衆との対立は必ずしも有産階級と無産階級との対立と同義ではないが，多分にその要素はある。この対立を理解するには，先づ，当時の一般の富と貧困に対する態度を考察する必要がある。一言でいふと富と貧困は共に悪と見なされた。貧者は必要に迫られて悪をなし，富者は驕りによって悪をなす。ここに驕りと訳したギリシャ語はヒュブリス（hybris）といひ，最も忌むべき性向と考へられた。この語には様々な訳があり，Liddell and Scott によると，理不尽，横暴，傲慢，邪悪，放埒，人権侵害などの訳が与へられてゐる。死ぬべき運命の人間が恰も不死身の神の如く振舞ふ罪と言ってよい。このやうな富と貧困の形容を見ると，両方悪であるとはいへ富の方がより程度の高い悪であるといふ印象を受ける。現代の資本主義社会と違ひ，鋭い商業感覚，創意，たゆまぬ利益の追求によって巨万の富を築いた者（例えば Bill Gates）が尊敬されるといふやうなことは有り得なかった。従って，エリートは常々，自らの富を誇ることなく，進んで寄付を行ひ，大衆の反感を買はぬやう勤めたのである。さうしないと単にヒュブリスのレッテルを貼られるだけでなく，訴訟を起こされて巨額の罰金を課せられるおそれがあり，又，議会で動議を提出した時，大衆の支持を得られないのであった。このやうなエリートと大衆の間の相互援助の下にアテネ民主制の均衡が保たれたと言へる。しかもこの均衡はかなり安定したものであった。510年のクレイスセネースによる確立以来，途中短期間の寡頭政治による

中断があったとはいへ，アテネ民主制は322年アテネがマケドニアによって征服されるまで続いたのである。

ではアテネ民主政治は成功であったと言へるであらうか。アテネは直接民主制で重要な政策はすべて民会（eklesia）での市民（十八歳以上の男子）の投票によって決定された。現代の総理大臣や大統領に該当する地位は存在しなかった。民会での議題を決定したり，民会で決められた政策を執行する評議会（boule）とよばれる機関もあったが，この構成員は市民の中から籤引きによって選ばれた。民会はプニュックスとよばれる半円形状の屋外集会場で開かれ，多い時には六千人以上の市民が出席した。すべての市民に投票権，発言権があったとはいへ，六千人以上の往々にして粗暴な聴衆を前にして動議を提出し市民の支持を得るにはかなりの雄弁とカリスマを必要としたと思はれる。そのやうな政治家の例がペリクレス，デモスセネースであり，彼等は比較的良政を敷いた為，彼等の活躍した時代のアテネは繁栄した。しかし彼等と雖も先に述べた階級対立から超越してゐたわけではない。ペリクレスは民衆の支持を得る為に公共法廷における陪審員（これも市民の中から籤引きで選ばれた）に日当2 obols（6 obols＝1 drachma）を支払ふといふ動議を民会に提出して可決された。デモスセネースはある日の民会での演説を次の様に始めてゐる。「アテネ市民諸君，私は今まで，軍艦建設費用，祝祭開催の費用，その他の現金寄付，捕虜買戻しの為の出費等々の公共資金に常に気前良く貢献してきたといふことを述べることもできる。しかし私は一切言ふまい」（VIII 70-71）。逆に民主制失敗の例もある。市民がデマゴーグに扇動され後で後悔するやうな政策を支持したこともしばしばある。その顕著な例は，428年クレオンに扇動されアテネに対して反乱を起こしたミュティレーネーの成人男子全員を殺害する議決をしたこと（もっともこれはディオドトスの冷静な議論の影響で撤回された），415年アルキビアデースに扇動されシシリー島シラクサに出兵する議決をしたこと，406年アルギヌーサエの海戦で溺れた水夫を救はなかった廉で六人の将軍（strategoi）全員を死刑に処したこと（この時ただ一人反対の票を投じたの

がソクラテスであった)。最後に399年のソクラテスの不当な処刑も挙げねばならない。

古典期アテネの経済思想—序言

英語の Economy といふ言葉はギリシャ語の oikonomia から来てゐる。これは oikos（家）と nomos（習慣，法律）との複合語である。従って oikonomia は直訳すると Household management である。クセノフォンに Oikonomikos といふ作品がある。これは oikonomia の形容詞であるから「家政に関する」著述といふ意味である。この作品は二部に分かれ，第一部はソクラテスとクリトブーロスとの会話，第二部はソクラテスとイスコマコスとの会話より成る。第一部においてソクラテスは斬新な価値論を展開する。物には使用価値と交換価値とがあり，フルートを吹けぬ人にはフルートの使用価値はないが，市場で金銭と交換できる故に価値がある。しかしそこで得た金銭を悪用すれば価値はなくなる。又，人の財産目録の中に知識や友人を入れる。第二部において裕福な大地主イスコマコスが如何にして若い妻を有能な家の管理者に教育したか，又，その他一般に農業経営のあり方について述べる。クセノフォンは家庭経済における妻の貢献を充分に評価してゐる。妻は夫の平等なパートナーであり，その貢献は夫より大であるとさへ言ふ（vii 13-14)。この点においてクセノフォンは当時の一般的知識人よりも進んだ考へを持ってゐたと言へる。後で述べる如く，哲人君主の中に女性も登用したプラトンも同様である。しかしアリストテレスは女性の理知能力を軽視し，家庭において妻は夫の平等なパートナーではなく，妻は単に夫の命令に従ふべき存在とみなした。第二部の後半においてイスコマコスの父親が如何に悪い農地を安く買ひ改良を加へてその価値を高め高額で売却して利益を上げたかといふ記述は当時の経済観念を知る上で貴重である。これを聞いたソクラテスは貿易商が小麦を安い時に仕入れて高く売るやうにかと言ってイスコマコスをからかふ。当時一般の考へでは貿易で利益を得ることは不名誉であっても農業によって利益を得ることは名誉と考へ

られてゐたのである。

クセノフォンには Poroi (Ways) といふ作品もあり，355年に書かれたこの作品の中でクセノフォンは丁度同年に第二次アテネ同盟が崩壊し大きな財源を失ったアテネ経済再建の方策をいくつか提案する。この提案の一部は同年財務長官に就任したエウブーロスによって実施されたと言はれてゐる。この作品においてもクセノフォンは鋭い経済感覚を示してゐる。この方策の一つは，外国人居住者や貿易商を優遇してペイライウス港の発展に寄与すること，一つは，ラウリオンの銀山への投資を拡大して収益を増大させることである。この作品を読めばクセノフォンが収穫逓減の法則，供給が利益に追随する，といふ経済原則に通暁してゐたことは明らかである。

上述のクセノフォンの二作品及び後述するアリストテレスの『ニコマコス倫理学』第五巻には現代経済学の範疇に属する議論が含まれてゐる。しかしこの小論で私が経済思想と言ふ場合，現代経済学の範疇以上の内容，即ち，現在は倫理学の一部と見なされてゐるものが含まれる。何故このやうに，いはば，狭義と広義の経済学を考へねばならないのか。それは現代経済学が，物の生産，消費，分配といふ経済行動において，人がどのやうに行動するかといふ問題のみを対象にして，どのやうに行動すべきかといふ問題を対象外においたからである。このやうに倫理的側面を排除することによって現代経済学は純粋科学たらんとしたのであるが，経済行動を説明する為に設けた効用極大，利益極大の仮説が，知らず知らず恰も好ましい行為であるかのやうにみなす弊害に陥ったのである。この点に関して Daniel M. Hausman and Michael S. McPherson, *Economic Analysis and Moral Philosophy*, Cambridge, 1996 は経済学者が人間は常に利己心を追求するといふ仮説に基づいて理論を展開する故，経済学を学ぶと利己的になる傾向が生ずると言ってゐる。

プラトンとアリストテレスはこの広義の経済学については多くを語ってゐる。プラトンとアリストテレスにとっては経済学は倫理学の一分野であるから，先づ彼等の倫理思想を知らねばならない。以下，プラトンとアリストテレスの倫

理思想，プラトンの経済思想，アリストテレスの経済思想の順に論及しようと思ふ。

プラトンとアリストテレスの倫理思想

では次にプラトンとアリストテレスの倫理思想について述べよう。私はこの二人の倫理思想は根本的には同一であると思ふ。しかしその細部では相違点もあるが，これは以下の論述のなかで逐次触れることにする。以下，プラトンとアリストテレスの倫理思想を次の二原則に分けて論じようと思ふ。(1) 行為の善悪よりも人格の善悪を優先する。(2) 善と快楽とは異なること。(ここで快楽といふのは必ずしも肉体的快楽のみをいふのではない。効用といふ言葉で置き換へてもよい。)

(1)　一般に近代の倫理思想は行為中心であり，古代の倫理思想は人間中心であると言はれる。プラトンとアリストテレスとにとっての最大の関心事は人間が如何に人間らしく価値のある人生を送ることができるかといふところにある。この様な最善の人生をギリシャ語でエウダイモニアとよぶ。この言葉を幸福と訳すと，プラトン，アリストテレスの倫理思想が功利主義に類するものになってしまひ不適切である。幸福といふ言葉は「私は今幸せです」といふ風に短期間の形容にも使ふが，エウダイモニアは人間の一生の形容である。従って，一人の人間がエウダイモニアであるかどうかはその人の生涯が完結するまではわからないのである。極端な場合には，死後も尚且つわからないかもしれない。何故ならば，もしも息子が盗賊になったとしたら，その人の生涯はエウダイモニアとは言へないからである。

人間らしく価値のある人生とは，理智，正義，節制，勇気等の徳が充分に発揮される人生であり，その様な人生を達成し得る優れた人間を育成することが教育の最高の目的となる。一旦優れた人間が完成すれば，優れた行為はそこに自然に派生すると考えられる。これは恰も孔子の「心の欲する所に従って矩を踰えず」(為政第二) の境地である。プラトンが『国家』の中で

詳説する哲人君主のための教育はまさしくこの様な教育である。プラトンはこれを「神に目を向けさせる」ことと考へる。アリストテレスも又,『ニコマコス倫理学』において,最善の人生は「神に目を向ける」ことであると言ふ。これに対して,功利主義は行為のもたらす結果の善悪のみを重要視する。仮に動機が悪くとも,結果がよければその行為は善とみなされる。プラトンとアリストテレスとにとってのよい行為とは,よい動機に基づき,理性的判断のもとに行はれる行為である。

(2) プラトンもアリストテレスも快楽と善とは異なり,善が快楽に優先するといふ点で一致する。彼等はストア学派の様に快楽は避けるべきものだとは言はない。しかし,功利主義者の様に行為の規準を快楽に求めない。正しい行為は正しいが故にするのであって,往々にしてそこには快楽(精神的)が附随するとはいへ,快楽のために行ふのではない。

プラトンの快楽観が最も明快に提示されてゐる著作は『ゴルギアス』である。この著作の中でソクラテスは快楽主義者のポーロスとカリクレスと対話し,快楽にはよい快楽とわるい快楽がある故,快楽は行為の規準になりえぬこと,人は快楽の伴ふ伴はざるとに係らず正義のみを求めるべきことを説く。ソクラテスはカリクレスに対して,「お前にとって最高のエウダイモニアとは,かゆい所を一生掻きつづけることではないのか」と皮肉る。『ゴルギアス』(466以下)を読むと,プラトンにとって正義(dikaios),善(agathos 又は kalos),エウダイモニアは同義語であることがわかる。同じテーマは『国家』第二巻(361)にも現はれる。そこでは,正義を行ふ人は,あらゆる快楽を剝奪されても,なほかつ最もエウダイモン(エウダイモニアの形容詞)であると説かれる。Simone Weil は *Intimations of Christianity among the Ancient Greeks*(古代ギリシャ思想におけるキリスト教の暗示)の中で,十字架上のキリストこそあらゆる快楽を剝奪されてなほかつ最もエウダイモンなる存在の象徴であると言ふ。

『プロタゴラス』においてもソクラテスは,プロタゴラスの浅薄な倫理観の

当然の帰結として，ベンサムを想起させる様な功利計算を示してプロタゴラスを遣り込める（357）。まさにソクラテスのアイロニー躍如たるものがある。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』第十巻において快楽について論ずる。彼の快楽観はプラトンよりも幾分肯定的であるとはいへ，本質的には差異はない。一箇所引用すると，「かくして，快楽がすなわち「善」であるわけでもなく，またあらゆる快楽が好ましいわけでもないということ，しかも，快楽のなかには他の快楽とは種を異にして，ないしはそのよって来るところを異にして，即自的に好ましくあるようなそうした快楽も存在するということが明らかになったものと思われる。」（1174A9—10. 高田三郎訳，岩波文庫）ここに即自的に好ましいと言はれる快楽の例は神を観照する快楽である。又，プラトンと同じく，優れた人間は善を善のためになすといふ（1105A31—32）。ベンサムは，快楽は行為の結果生ずる感情であり，行為の種類にかかはらず同質のものであり，様々な行為から生ずる快楽を足し合せることができると考へた。アリストテレスはこのやうな一般に人の陥り易い錯誤を指摘してゐる。確かに行為の結果生ずる感情としての快楽もあるが，アリストテレスによれば，一般的には快楽とは行為を楽しむ度合であり，従って個々の行為に固有のものである。アームソンはこれを「詩を読むことによって得られる快楽を，切手収集によって得ることは不可能である」（雨宮健訳『アリストテレス倫理学入門』岩波現代文庫，182ページ）と形容する。

倫理思想は大雑把に義務論（deontology）と功利主義（utilitarianism）に二分される。前者の代表はカントであり後者の代表はベンサムである。簡単にいふと前者は行為をなすべきが故になし，後者は行為のもたらす快楽（精神的快楽も含めて）の故になす。プラトンとアリストテレスは優れた人間にとっては善と快楽は一致すると考へるから，彼等の倫理思想は両者の折衷の如く聞こへるかもしれない。しかし彼等は正しい行為は仮に快楽が伴はなくともなすべきであると言ふから後者よりも前者に近いと言ふべきである。一般に John Stuart Mill は功利主義者の代表のやうに考へられてゐるが，一時期ミルはベ

ンサム流功利主義から離脱し，むしろプラトン，アリストテレスに近い考へ方を示した。晩年再びベンサムへの回帰があったが，その後書かれた『功利主義』にはベンサム，反ベンサムとの間の激しい揺れ動きがうかがへる。例へば，第一章に，快楽はその量のみならず質をも考慮すべきであると言ひ，更に，不遇なソクラテスの方が満ち足りた豚よりも価値がある，と功利主義の根底を覆すやうな発言をする。ところが，第五章においては，効用は他のすべての量的存在と同じく数理の原則に準ずる，と完全にベンサムを踏襲する。又，第四章に，徳は他の目的のためにではなく，それ自身のために求むべきであると言ふ。これはプラトンとアリストテレスの思想に異ならない。しかし，その直後に，人が徳を求めるのは徳には快楽が伴ふからであると言ひ，ベンサムに堕する。どちらが本当のミルなのかは読者一人一人が決めねばならない。

ここで一言補足しておきたいことは，功利主義は必ずしも個人的利益追求主義と同等ではないといふことである。一致する部分と相反する部分とがある。功利主義は利益もしくは快楽に第一義的価値を認めるという点において利益追求主義とその基盤を等しくするが，もともとベンサムによって提唱され経済学者によって継承された功利主義は，私利（個人の利益）ではなく公利（公共の利益）を最大にしようとする点において，私利追求主義とは異なる。John Rawls, *Theory of Justice* はこの点を批判して，功利主義の下では公利（公共の利益）を最大にしようとして個人の基本的権利が侵害されるおそれがあると言ってゐる。しかしベンサムは単純に公利と私利とが一致すると考へた節があり，アダム・スミスも有名な「見へざる手」の理論により，私利の追求が市場原理を通して公利の増進に結びつくといふ議論を展開してゐる。例へば，「我々が夕食にありつけるのは，肉屋，酒屋，パン屋等の慈悲心によるのではなく，彼等が自己の利益のために行動してゐるからである」（『国富論』，第二章）。因みにマルクスがこの個所を批判して，如何によい結果を生まうとも，元の動機がよくなければよい行為とはいへないと言ってゐるのは興味深い。結果さへよければよいといふ功利主義の核心をつく批判である。

プラトンの倫理思想の根底にはイデア論がある。イデア論の第一の役割は真の実在と目に見えるものとの関係を説明することにある。藤沢令夫『ギリシャ哲学と現代』（岩波新書）によると，唯物主義者は「ここに机があり，それが目に見える」と言ふのに対し，プラトンは「ここに机のイデアが映し出されてゐる」と言ふ，と説明する。第二の役割は正義，善，美等に絶対的価値を与へることである。これによってプラトンはソフィストの相対主義を反駁しようとした。正義，善，美等のイデアは天国に在り，人間は生まれる前にこれらのイデアをはっきりと見ることが出来た。この世でこれらのイデアをおぼろげながら見ることが出来るのはその故であると言ふ。教育の目的は比喩や例証によってイデアを思ひ起こさせることである。『国家』第七巻に有名な洞窟の比喩が語られてゐる。大多数の人間は（大学教授も含めて）壁に映る影絵を真実の存在と信じ，洞窟の外の明るい太陽の存在を知らない。（大学教授の場合，影絵は地位と名誉である。）少数の哲人君主となるべき人々のみが洞窟の外に出て太陽を見る。ここに太陽は善のイデアの比喩である。又，これは先に「神に目を向ける」と言ったこととも同じである。『饗宴』の中でプラトンはこの行為をエロス（愛）といふ言葉で形容してゐる。愛とは全身全霊をある方向に向けるといふ意味である。「プラトンにとって人生の目的は存在の根元を基礎づける道理と秩序を把握しそれを生活に具現させることである。」（Julius Moravcsik, *Plato and Platonism*, Blackwell, 2000, p. 98）ここにおいてプラトンの形而上学と倫理学が結合する。

アリストテレスの場合にはこれ程はっきりした形而上学と倫理学の結合は見られない。しかしアリストテレスの形而上学と倫理学は目的論（teleology）を共有する。アリストテレスは物にはすべて固有の機能があり，その機能を最高度に発揮する状態を善（arete）といふ。目のアレテーはよく見ることであり，馬のアレテーはよく走ることである。では人間のアレテーとは何か。ここで面白いのは，アリストテレスにとって人間のアレテーとは，目や馬の場合のやうに人間らしさを最高に発揮する状態ではないといふことである。それは人

間を超えるものに目を向けること，即ち観照に他ならない。

プラトンの経済思想

分業論

プラトンには狭義の経済学に属す内容の記述は余りない。その例外は『国家』第二巻に現はれる分業の説明である。ここでプラトンは如何にポリスが形成されるかを説明する。個人には能力と嗜好の相異があるから，例へば農業に向いてゐる人は農業に従事し，靴を作ることに向いてゐる人は靴屋になり，お互ひの製品を交換する方が，一人で全ての物を作るよりも賢いことである。又，その方が効率も上がる。これがポリスの始まりである。アダム・スミスも『国富論』第一章と第二章において分業を論ずるが，分業が効率を上げるといふ点においてはプラトンと同様だが，その形成の契機についてはプラトンと異なる。プラトンによれば分業はポリスを構成する個人個人がお互ひの能力と嗜好の相異を考慮した結果理性的に選択したものであるのに対して，スミスによればそれは人間の理性的判断の結果ではなく，人間の交換本能ともいふべき性向に根ざしてゐる。人間の相異は分業の原因ではなく結果であるといふ。又，分業の例として，プラトンが百姓，靴屋，大工等の分業を挙げるのに対し，スミスは針工場で一人は針金を伸ばし，一人はそれを切り，一人はそれに穴を開ける，といふ例を挙げる。この種の分業は古典期にも知られてゐた。例へば，クセノフォンは靴工場で一人が皮を切り，一人が縫ひ，一人がそれを靴に仕立てるといふ分業の例を挙げてゐる。(*Cyropaedia*, VIII.ii.5)

分業の結果階級が生ずる。プラトンは当然，階級間の対立の可能性を認識してゐた。対立は『国家』においては哲人君主により，『法律』においては様々な規制により制御される。アリストテレスは後に述べる如く，分業の結果生ずる物の売買は当事者同士の社会的絆が強まるやうな形でなされねばならないと説く。

金銭欲の戒め

プラトンの利益追求，金銭欲に対する糾弾は主として『国家』及び『法律』の中に見られる。先に述べたやうに，プラトンは『国家』第二巻においてポリスの生成について論及する。先ず初めは農夫，大工，織工，靴屋といふ必要最小限度の構成で始まるが，更に，鍛冶屋，様々な職人，羊飼ひ，牛飼ひ，商人等が加はりポリスは充実していく。ここまではよいのだが 372D より贅沢なポリスの描写が始まる。この贅沢なポリスに新たに加はるものは，贅沢な家具，香水，高級娼婦，刺繍細工，詩人，俳優，美容師，医者等々である。これらはどこの国にもあるものであり，このすべてにプラトンが反対したとは考へられないが，ここでプラトンが贅沢なポリスを取上げた理由は，ポリスが贅沢になると共に，人間の欲望を満たすものが増え，貪欲が増大し，不正義が行はれる機会が増えるといふことを示すためである。

『法律』の中には，金銭欲を戒める個所は無数にある。その全てを列挙するわけにはいかないが，例へば，『法律』(870A) においてプラトンは次の様に言ふ。「まず，最大の原因は，貪欲のために粗野になった魂の内部でその支配権を握る，欲望にある。そして多くの場合，その欲望は，世間一般の人々の最大最強の憧れの的（財貨）にむけられている。財貨というものは，ひとの生まれつきの卑しさや無教養に乗じて，それを飽くことなく無際限に所有しようとする愛着を，数かぎりなく生みだす力をもっている。そして，その無教養の原因はといえば，それはギリシア人の間でも異域の人々の間でも同じように口にされている，富に対する誤った賞賛以外にはない。」(式部久訳，プラトン著作集，勁草書房) 更に，「善き人というものは，大きくて強かろうと小さくて弱かろうと，金持であろうと貧乏であろうと，節制と正義の人であるかぎり，幸福でありしあわせなのだ。たとえ「キュラスやミダス以上に」金持であっても，不正であるかぎり，不幸でみじめな生活を送るものだ。」(660E)「地上の金と地下の金，そのすべてをもってしても，徳の価値に匹敵しはしない。」(728A)「非常な金持ちが同時に善い人間であることは，不可能である。」(742E) こ

の最後の引用は，マタイ伝19.24の「金持ちの天国に入るは駱駝の針の目を通るより難し」を連想させる。これも又，Simone Weil の言ふ古代ギリシャ思想に現れたキリスト教の暗示の例と言へるであらう。プラトンにとっての重要さの順位は (1) 魂，(2) 体，(3) 財貨，である。この順位は 661A，697B，743E，870B に繰り返し現はれる。プラトンが『法律』で建造しようとしてゐる理想国マグネシアはある程度海から離れた場所に設定されてゐる。その理由は外国貿易によって多額の金銀が国内に流入することを避けるためである（705B)。まさに現代の経済政策の正反対である。

政治思想

当時のアテネの貴族階級の子弟の大多数がさうである如くプラトンも政治に積極的に関与することが目標であったに違ひない。しかし自らの師ソクラテスの不当な処刑などが契機になって次第に民主政治に失望していったと思はれる。この様な時に書かれたのが『国家』で，特別の教育によって養成された哲人君主による専制政治を提唱する。哲人君主の下に戦士，生産者の二階級があり，彼等は哲人君主に従ふものとする。すすんで従ふのか，いやいやながら従ふのかは，はっきりしない。要するにプラトンは彼等については多くを語らないのである。哲人君主は私有財産を持たず，妻子も共有する。ここには極端な共産主義の原型がある。この国家の一つの民主的な面は，女性も特別教育を受けることが出来，有能ならば哲人君主の仲間に入れるといふことと，下の二階級の家庭に生まれた子供でも有能ならば哲人君主養成の教育を受けることが出来，又逆に，哲人君主の間に生まれた子供も無能ならば下の階級に落とされるといふ規定が設けられてゐるといふことである。このプラトンの理想国家は第二次大戦直後欧米で甚だ評判が悪く，プラトンはスターリン，ヒットラーと比べられさへしたが，これは全くの誤解である。プラトンは『国家』第八巻で僭主政治を最悪の政治形態とみなしててをり，そもそもプラトンにとって国家の目的は市民をして最も徳に適った生活をせしむることであるといふことを忘れては

ならない。確かにプラトンは公共心の育成を大事なことと考へる（『法律』875A 及び 923B）。しかし，これを全体主義とみなすのは誤りである。

『法律』における様々な経済統制

『国家』においては，プラトンは哲人君主の統治に全幅の信頼を寄せてゐる故，法令規則は最小限に留められるが，『法律』においては，市民生活の全般に亘って様々な規則が設定されてゐる。これはプラトンがこの二著作執筆時期の間にシシリー島のシラクサにおける哲人君主の養成に失敗して，より現実的になった為とも言はれてゐる。『国家』に描かれるポリスをプラトンの理想とすれば『法律』に描かれるポリスはプラトンの次善であるといへる。プラトンは『法律』における政治形態を君主制と民主制の混合であると言ってゐる。確かにアテネの民会の如きものが存在してゐるやうであり（764），後で述べる重要な国の機関「暁の会議」においては若い人も含めて多くの意見を取り入れようとしてゐる。しかしこの両者に共通することは，市民が最もエウダイモンなる生活を送ることが出来るやうなポリスを建設しようとしてゐることである。相異はこの目標を達成する為の方策にある。以下『法律』における様々な規則を項目別に列挙しよう。

私有財産

『国家』においては支配階級の私有財産は禁止されたが，『法律』においては認められる。但し，財産額に準じて四階級が設定され，夫々の階級における財産の上限と下限が設定される。階級による差別は政治への参加に関しては存在しないが，後に述べる市区保安官には最高階級しかなれないとか，市場保安官には第一，第二の階級のみから選ばれる等の差別が設けられてゐる。土地家屋は最初，市民に籤によって平等に配分され，その売買を禁ずる。プラトンがこの様に財産の上限と下限を設けたのは，貧富の差が増大すると均衡が崩れ内乱が生ずるおそれがあることを認識してゐたからである。

非熟練労働

市民は熟練を要しない手工業労働（banausikos）に従事すべからざること。プラトンはこのやうな労働は人格形成に悪影響を与へるものと考へた。

熟練労働

市民は熟練労働（demiourgos）にも従事すべからず。しかしこれは上の非熟練労働の禁止とは全く別の理由による。プラトンは熟練労働者（以下，職人とよぶ）には充分の敬意を持ってゐた。にもかかはらずこれを市民に禁止したのは，市民はただ一つの仕事，即ち，政治と行政に参加することに従事すべきだと考へたからである。但し，農地の管理は認められる。

小 売 業

市民は小売業（kapeleia）に従事すべからず。小売業は本来必要なものだが，利益増大への欲望をかきたてるから避けるべきである。小売業が得ることの出来る利益率は法律によって決められる。上記の三職種，非熟練労働，熟練労働，及び，小売業はすべて外国人が行ふものとする。奴隷は農耕及び家庭労働に従事する。ここで注意すべきことは，『国家』では奴隷は殆ど言及されないが，『法律』でははっきりその役割が規定され，奴隷への対処の仕方が詳しく書かれて（776B-778A）ゐることである。

外国貿易

外国貿易によって多額の金銀が国内に流入することを避けるために理想国は海から離れた所に建設されるといふことは既に述べた。更に加へて外国貿易は国家防衛に必要な物資を確保する目的以外には禁止される。後者の場合は国家が貿易に直接従事する。

通貨制限

国内においては法定通貨のみが使用され金銀は一切使用されない。公用もしくは特別の理由で外国へ行く者には国際的に流通可能な通貨が支給されるが，帰国時に返還されねばならない。

農 作 物

農作物の市場での売買は居住外国人にのみ許される。

信用取引

信用取引は禁止される。

市場統制

物品の売買は決められた市場でのみ許される。価格は一日の内に変更すべからず。

公正価格

職人（demiourgoi）は製品の真の価値に相当する価格を決めるべし。

利　子

金銭の貸し借りに利子を取ってはならない。

統 制 官

『法律』の理想国マグネシアには種々の役職がある。経済行動にかかはらないものも含めて列挙すると次の通りである。先づ最も重要な役職は護法官である。これは読んで字の如く法の守護者であり最高裁判所の判事のやうなものであるが，同時に立法も行ひ，又，財産登録の管理や輸出入管理のやうな細かい実務も行ふ。次に重要な役職は教育監である。これは護法官の中から選ばれる。プラトンが如何に教育を重んじたかを示してゐる。次に執務審査官がある。これは他の諸々の役人がその職務を忠実に果たしてゐるかどうかを検査する。主として以上三種の役人により構成される重要な機関として暁の会議がある。これは読んで字の如く暁に集会して法律のみならず諸々の国家の重要事を討論審議する。経済行動に直接かかはる役職には次のものがある。都市の秩序を司る市区保安官，市場の秩序を司る市場保安官，農地を司る農村保安官，等である。市区保安官は職人に関する法的事項も扱ふ。

アリストテレスの経済思想

価格決定理論

これは『ニコマコス倫理学』第五巻に述べられてゐる。価格決定理論といふと恰も典型的な狭義の経済学のやうに聞こえるが，多分に公正価格の意味合ひ

が強いから，広義の経済学に属すと言った方がよいかもしれない。現代経済学は公正価格を通常問題にしない。市場において需要と供給の均衡により決る価格を即ちよしとするからである。そもそも第五巻の主題は正義である。従って，アリストテレスの関心が何が正しい価格かといふことにあったのは確かである。アリストテレスは先づ正義を一般的正義と特殊的正義とに分ける。アリストテレスが一般的正義とよぶものはギリシャ語の dikaiosyne が通常意味するもので日本語の正義よりも広い意味を持ち殆ど徳そのものに近い。特殊的正義とは価値（名誉，地位，財貨等）の分配に関する正義であり日本語の公正に近い。第五巻の主題はこの特殊的正義である。アリストテレスは分配は比例によるべしと言ふ。その意味は次の通りである。A と B の取り分を $S(A)$ と $S(B)$ とし，その価値（名誉，財産等）を $F(A)$ と $F(B)$ とすると，$S(A)/S(B)=F(A)/F(B)$ の関係が成り立たねばならない。この方式の一つの例は「政治学」(1318a 10-40) に現はれる。そこでアリストテレスは市民の投票権を財産に比例させる，即ち，A が B の二倍の財産を保有するならば A は B の二倍の票を行使し得る，といふ議論を考察する。

続いてアリストテレスは価格論，より正確には物と物との交換比率の問題を取り上げ，交換比率も比例の原則に従ふべきだと言ふ。この議論の要点は次の引用文にある。「かくして，農夫の靴工に対するごとくに，靴工の所産が農夫の所産に対すべく均等化された場合，取引は応報的となるであろう。」(高田三郎訳『ニコマコス倫理学』1133a 33-35) この文章の曖昧さが後世の学者の様々な異なる解釈を生み出したのである。農夫を N，靴工を K で表し，農夫の所産の価格を $P(N)$，靴工の所産の価格を $P(K)$ で表すとしよう。上の文章を字義通り解釈すると，$N/K=P(N)/P(K)$ となり意味をなさない。従ってこれは何らかの適切な関数 F を導入して，$F(N)/F(K)=P(N)/P(K)$ と解さねばならない。問題は F は何かである。

最も自然な解釈は F を必要性或いは効用 (chreia) とみなすことである。この場合勿論 $F(N)$ は靴工の農夫の所産に対する必要性と定義する。この解釈の

根拠は次の引用文にある。「このことはしかるに物品が何らかの仕方において均等なものでないならば不可能であろう。だからして，さきにいったごとく，あらゆるものが或る一つのものによって計量されることを要するのである。この一つのものとは，ほんとうは，あらゆるものの場合を包むところの需要にほかならない。」(1133a 26-28) ここで高田氏が需要と訳してゐる言葉は chreia であり，必要性或いは効用と訳す方が適切である。まさしく，必要は交換の母である。この解釈を効用価値説とよぶことにしよう。

第二の解釈は労働価値説である。これはトーマス・アキーナス，カール・マルクスによって提唱された。この場合，$F(N)$ は農夫がその所産の製造に費やした労働とみなす。アリストテレスが直接労働に言及したわけではない。この議論の根拠は次の引用文にある。「実際，国 (koinonia) の維持されてゆくのは比例的な仕方でお互いの間に「応報」の行われることによってなのである。」(1132b 32-33) ここで国もしくは共同体の維持といふ言葉がキーワードである。先にプラトンの理想は市民が最もエウダイモンなる生活を送ることが出来るやうなポリスを建設することであると言ったが，これはアリストテレスの場合も同様である。共同体の維持はその為に必要である。もしも自己の所産への報酬が自分の費やした労働経費を充分に償ふものでなければ，そこに不満が生じ共同体の維持は確保できない。

第三の解釈はポラニー (Karl Polanyi, “Aristotle Discovers the Economy”) によって提唱されたもので $F(N)$，$F(K)$ を夫々農夫と靴工の社会的な地位とみなす。これは先に述べたアリストテレスの分配の理論における取り分をそのまま価格に置き換へたものである。この解釈は常識的にもをかしいし，又，もしもこの解釈が正しいとすると，アリストテレスは価格決定理論を分配の理論と別個に論述する必要はなかったのである。

ここで注意すべきは，アリストテレスの価格決定理論の対象は，二人の人間が既に生産された物品を持ち来たってそれをお互ひに交換しようとする場合の交換比率の決定である。生産過程は交換に係る人の心情への影響を除いては対

象外であり，又，他の生産者や消費者の存在も無視されてゐる。従って，通常現代経済学の対象になる市場における需要と供給の均衡に基づく価格決定理論とは異なる。しかし現代経済学もアリストテレスの考へる状況の分析をしないわけではない。その最も有名な例はエッヂワースの契約曲線であり，エッヂワースは二人の物品の交換比率はお互ひの効用無差別曲線が共通の接線を持つやうな点の集合（即ち契約曲線）に含まれるが，効用最大の原理だけからは一義的には決らないといふことを示した。勿論実際には交換比率は一義的に決らねばならず，それは最終的には両者の交渉力によって決る。交渉力は何によって決るかといへば，それは両者の地位，名誉，財産，物品製作に費やした労働等であると考へられるから，或る意味では，上記三解釈の全てが関係してくるといへる。

アリストテレスは交換を可能ならしめるものは必要又は効用であることを述べた後，交換を円滑ならしめるものは金銭であると言ひ，斬新な通貨論を展開する。プラトンと同じくアリストテレスも通貨をそれ自体価値を持つものとしてよりも法定通貨とみなした。このことはギリシャ語の通貨が nomisma であり語源的に nomos（習慣，法律）に由来してゐることと無関係ではない。

金銭欲の戒め

アリストテレスの金銭欲譴責の厳しさはプラトンに勝るとも劣らない。『政治学』第一巻において家政術（oikonomike）が論じられるが，その目的は生活に必要なものを調達することにあり，それ以上の財貨の追求は商品売買術（kapelike）とよばれ激しく非難される。オイコノミケーは必要量によって自然な制限が課せられるが，カペーリケーにおける財貨の追求には制限がないといふのだ。中でも金が金を生む利子付き貸借は最も忌むべきものと考へられた。よく知られてゐる様に，この考へは中世のスコラ哲学者に受け継がれた。陶淵明の詩句『營己良有極，過足非所欽』はこのアリストテレスの思想を簡潔に表してゐる。

政治思想

プラトンは様々な職業間の分業を拡張して国家（ポリス）の成立を説明したが，アリストテレスは先づ最初に最小の自給自足の単位である家庭があり，次にいくつかの家庭間の交易の必要から，より自給自足度の高い村が成立し，最後に自給自足度の最も高い国家が成立する，と説明する。人間は個人個人では存在出来ず，国家を形成することによって初めて全ての欲求を満足させることが出来，完全に自給自足に成り得るといふ。この事実をアリストテレスはかの有名なる語句「人間は社会的な動物である」（『政治学』1253A2）によって表す。プラトンとアリストテレスに共通なことは，いづれの場合も，国家の成立は人間の理性的判断の結実であると考へる点にある。

アリストテレスは居住外国人（Metic）であったから政治に参與することは出来なかった。しかし，『政治学』において，ギリシャ全土の多くのポリスにおける様々の政治形態の実証的研究を踏まへて，自らの政治思想を論じてゐる。又，『アテネの政治形態』において古代より四世紀後半までのアテネの政治史を記述してゐる。アリストテレスはプラトンと同じく，多分に貴族的性向を持ってゐるからアリストクラシー（即ち，優れた者—aristos—による政治）に同情するところがあるが，プラトンに比べると民主主義の長所も認めてゐる。プラトンの『法律』に描かれてゐる理想国家に似てアリストクラシーとデモクラシーを折衷したやうな政治形態を理想としてゐたやうに思はれる。しかしプラトンよりも非民主主義的な点は，女性と奴隷に対する差別意識がより強いといふところである。奴隷の大部分は理性的判断の出来ぬ，本来奴隷たるべき人間であると考へる。又，女性の理性力は男性の半分だといふ。クセノフォンのイスコマコスが妻の人格を認め奴隷をも人間として扱ふのと対照的に，『政治学』第一巻に描かれる家庭における人間関係の理想像によれば妻は夫に完全に服従し，奴隷は財産として管理される。

アリストテレスはプラトンの『国家』における哲人君主が私有財産を持たず，妻子も共有するといふ提案に対して強く批判してゐる。誰もが自分の物と思へ

ばこそ大事にするのであり，私有財産を持たねば慈善心を発揮する場面がなくなるといふのがその理由である。

アリストテレスは自身政治に参與することが出来なかったとはいへ，『ニコマコス倫理学』の第十巻をのぞいては政治に参與する人生をエウダイモンなものとして推奨してゐる。しかし第十巻では観照の人生を最もエウダイモンなものとし，政治に参與する人生を次善のものへ格下げしてゐる。以来，古典学者の間にどちらがアリストテレスにとって最善の人生なのかといふ論争が綿々として続いてゐる。この観照か実践かといふ問題は一般的な大問題であり，キリスト教においても仏教においても重要な論点である。ルカ伝 10：38-42 に，イエスがマルタとマリヤといふ姉妹の家を訪ねた時の話が書かれてゐる。マルタは忙しく働いてゐたが，マリヤはイエスの足もとに座ってイエスの話に聞き入ってゐた。マルタがイエスに不平をもらすと，イエスは，「マリヤはよい方を選んだ」と言ふ。又，道元を乗せた船が中国に着いてすぐ，日本産の椎茸を買ふために老典座が船にやってくる。道元が，なぜ座禅をせずに炊事の仕事などしてゐるのかと聞くと，老典座は笑って，炊事の仕事こそ修行であると答へる。私もこの問題にはっきりとした解答を與へることは出来ない。ただ，プラトンの洞窟の比喩において太陽の光を見た哲人君主があへて洞窟に戻って民衆を導くといふ話は甚だ示唆に富むと言ふに留めよう。これを実行したのがソクラテスである。ソクラテスはシンポジュームに行く日のやうに，出来れば立ったままでも一日中瞑想に耽りたいのだが，一旦シンポジュームに行けば皆と楽しく談笑し，酒を飲む。必要とあらば，戦場に赴いて勇敢に戦ふ。又，連日アゴラーにでかけて若者の教育に献身する。